

女
寶
方
萬
能
百
人
育
性
鑑
合







百集百人一有倭疆

[illegible]

中
 糸女とて
 糸女とて
 糸女とて

陸香山先生

つるり
の

1427

如
方
て
い
る
か

とけしとや

勝

女中持原

女中の初より一才に身と才はふ
 ろう座より次よりその事にも後々迄の
 女中の初より一才に身と才はふ
 ろう座より次よりその事にも後々迄の
 女中の初より一才に身と才はふ
 ろう座より次よりその事にも後々迄の



けさあまの朝、きささかりひのふへ、
 さて歸してハ男婦を父母にあらせり
 とはうゝあふべゝ、まハ我主人とありひ
 何事にも我まこととせど、まのまことハ
 心を帰の乃といふ、若まわきさふわり
 ともいふのくさりの、はたに親を
 わけぬをわかつたひさし、女を
 一生の四人はうゝあふべゝ、ありの
 てあゝ、はくも我得たぬりのあり
 ぬるまわきさふわり、あふべゝのすも
 つゝ、あふべゝのまのいもの、あり
 又我まこととせど、まのまことハ
 きささ、きささ、きささ、きささ、
 如くハ、きささ、きささ、きささ、
 勝負の事、きささ、きささ、きささ、
 せ、きささ、きささ、きささ、きささ、
 せり、きささ、きささ、きささ、きささ、



第娘の事

ひう 新御天皇天皇の御
 お母さまは八坂入の宮
 子の喜に合ふ宮子の御
 牙姫とて世にのまされ大
 人ふくむを愛くまうけ
 きたる宮をさへあつたわい
 牙はひらきうらあつたを
 恨を興とぬちを花道か
 牙姫其に成らんをめで
 きたるをさへあつたわい
 内ふへふ牙姫まゝとて
 文姫の乃て入る利あうか
 らと申さる親ゆりては
 とねと今帝すゝるわい
 ちとんとあふふあう
 しめとあふふあう
 ちとんとあふふあう



君ありといふめあつた
 ちとんとあふふあう
 ちとんとあふふあう

持統天皇

まゐるく夏

きたる

白あ

夜あ

わあ

ぶあ



柿本人麿

わあ

ふあ

尾あ

ああ

なあ

ひあ

ひあ



大に居る難云の事平陽
 雲の境方のけ若仁毛澤く
 仁を奪てふ武附に汝うい
 縁切といふ女平を度ふ
 妻は色いおしやう
 なる二平ふ海川ふも沈を
 飲ける成政ふふい其羅を
 ゆういむふふふふふふ
 りてやかく度せよあひ
 どやめ身の後と若く後
 にの若れ軍ふ度いて平を
 帝ふぬく若と廊なるい毛
 政のわきふふうてあり
 田道々喜
 田乃々武雲のやま有仁強
 天皇みふふ東夷に
 若くふうく田乃々武雲を

田道子妻

田原の武常のやまは有仁鍾
天皇二十六年東夷王命に
背くふしく田原の將軍を

山崎素人
 田子乃内
 くらや
 え
 まい
 あらえの
 姉
 おはうけ



雖^レ死^{スル}に付^テも其の國を官利
かゝて討^ツまは其意欲^ハし
とま賊に討^ツ死^スさむひつ我命
生^{ケル}て非^ズなるは自然^ニ然^ルる事
而^モ後^ニ日^ノ乃^チお初^メくつらん
汝^ハ自害^シして死^スさん人々其
善義^トと感^ゼぬといふなり

猿丸右史

興おこ
字やま



夢ゆめはくもさそさそ
秋あきをふりて

眞平の事
いづれ物に命を懸されたる
附^し肥の実年二の星おくけり
いととあひならん事いふあふ
よみて頼めとのめこころそと
に依る大場源太ふ藤されぬ
肥の松や濃きゆい附^し肥か
書前ふ人け解はあそて籠
の内ふ能をあらめ入すあふと
み成わい用伽の桶ふ通へ入
て頼人の花ついでふふふふし
悲しく遠うけま歌無と
ふあんをまどられ金成すつ
たふと終ふ松ふとのかれいぞ
軍勢と對して年成をまど
一たり成事をさうふ入給
む々もいふふ肥と事の
あ知ふふふふふ



秋子婦に



安海仲磨 あいのちゅうまろ

わまのち

五

2

卷

2

三

三

いふなり

藤史の漢いぬ
 意林^{イリン}をきわめし得^う
 もり時目の年法ありて成^{なり}
 るく然^{しか}るのひ前仲雅^{マサノリ}
 とそと所^{ところ}に仁徳天皇と姓^{なづけ}
 すのにはば子麻呂の姫と名^な
 わびありて常考して姓と
 ひきまゐつらんあられば姫の
 まやう我公帝は者をゆじ
 まう今がこそあふには人
 なんともぞいとそ世々に
 て着^きゆるるをみめいけり
 仁徳天皇の山紀^{ヤマキ}
 仁徳天皇の山紀ふかた有^{ある}
 て山紀も色々と里原山紀ふ
 かすはなまを山紀と撰^{えら}べり
 こころさあつらんをよめり
 大なるほいはれんと山紀

仁懐天皇の御紀

仁徳天皇の御代ふくやふくや
て西飛毛^{せひけ}とて皇居^{みやけ}の御代
かきすはるまゝの御代とて
まづまゐつらんまゐつらん
またたけいはるまゝの御代

我店を
おの
まう
あつては
よ紙をらと
人冬より



中一云幕にあさういあしをそ
るていあしをいあしにたれ
るあしをいあしにたれ
どそあしを帝をいあし
さあしをいあしにたれ
いあしをいあしにたれ
てあしをいあしにたれ

小野小町
花の多は

うすつゝ

多子

家

七

卷之五



采女

事^{ミコト}成^{ナリ}天皇^{ミコト}に^ニつ^ツ人^{ヒト}なり^{ナリ}来^キ世^ヨと
 い^イひ^ヒか^カう^ウの^ノこ^コも^モ世^ヨか^カと^トれ^レぬ
 な^ナり^リと^トう^ウけ^ケま^マん^ンと^トあ^アら^ラわ^ワる^ル
 ひ^ヒた^タれ^レも^モか^カび^ビく^クけ^ケと^トか^カを^ヲ
 わ^ワけ^ケる^ル帝^{ミカド}哉^{ナリ}い^イく^クけ^ケなり^{ナリ}く
 然^{シカドモ}こ^コに^ニう^ウ天皇^{ミコト}只^{タテマツ}一^{ヒツ}と^トな^ナれ^レ
 て^テぬ^ヌえ^エる^ルも^モか^カ一^{ヒツ}来^キ世^ヨい^イふ^フ
 こ^コか^カま^マな^ナれ^レも^モ帝^{ミカド}の^ノち^チと^トも^モを^ヲ
 も^モい^イふ^フの^ノこ^コも^モか^カ一^{ヒツ}来^キ世^ヨの^ノ風^{フエ}
 か^カを^ヲを^ヲか^カく^ク死^シし^シる^ル

紅毛膏

神も音を良なきつゝといふは
 の國乃後人傳れ上りてさう
 母より力をはきて力あるの
 か其力減ちて方々我り
 けり母のさうて田力増く神
 小教と教りてまの雲とよふ



蟬丸

此
の

中

海²

わさきてり

志家

わふさうれ実



泰議堂

和
田
の
系

十卷

二

漕
安
と

人なづか

わき
は
は
は
は



室の文城

室の御方乃花女みぎとひ
けることと申儀を御基に申さ
て給ふやうにあらむはふふと
申うつ^{あけ}御意^{あは}歎^{なげ}き院と市と
わの附^つ殿^{との}奉^{ほう}の^の人^{ひと}面^{おも}聞^{きこ}うと
あそむるにわひく
はともやぬ^なを^をあらわす
またわすれ^{わす}れ^れと^と申^まふ^ふを^をあら
と^と候^うく^くの^の内^{うち}へ^へ入^いる^る
かく^{かく}厄^{やく}と^とあり^{あり}と^とや

乃望の女

鐵幕之後乃^ハ中^ニ軍^ノの馬
 とをせめくさへん^ハ然^レつ
 多^クもまかうけ^ルを^ハこ
 て^ハ院^ノと^ハ初^メに^ハ金^ノを^ハし
 して^ハ金^ノを^ハあ^ハる^ハを^ハし
 といふ^ハに^ハなり^ハ



陽成院

統子の

客より

あ

みま川

急を以て

測と必



懐疑を去るにふたふた
 て山雲の舞を一時は馬依の
 属の琵琶の位なりて中細を
 着座するをありて只一夜の
 舞うなり其次の夜より
 ひやんの事影まゝ山所と落
 させ人の着座するを止れり
 依の属の歌をいふをせん
 あらわすうゝ事あるを
 或たのこころのけんを
 や命のわざをいふを
 ゐるをいふをいふをいふを

金谷の石

機軸守紙をきふとの中、如きの
馬は、二匹の中、のるゝをいふを
あつて、人々、一匹の馬、をいふ



是れ如く云う 吾等の向ふ肥乃
 次希う情にゆく 糸堀川の家
 あくく交まふこの恋を
 是れは重衡程なくも級のお
 に報されさき入るや成夫の
 不捕を属は屋と云う重衡の
 とをふとを陰のものと云ふ

河原太右

みちのく

丑

とら

非也

之秋安母

何事か



光孝天皇

君の志を

玄の野

知

王

わ^ろく^もに^て

おはなつ



敵軍の侵襲を信長と軍乃
 以敵軍の軍兵負て山田のふか
 佐との智へて壘居るに中
 にあるあつて七年の書でぬくこと
 いづりぬかをせんぬきのう
 のむき、またのやうなまも
 りをわけし母のまゝあらせ
 みいつたけさめわんものも
 あらうといひてやうなまも
 しはく人の様よりとほむ
 あくかりなるとかり

志望のいへ

本陣の大目附衆の宿願年
 は望の後とて高橋氏具重と
 リてかゝるさ英人ありと
 志望の花巻出陣のゆりと志

五
たろ

つるむ

ふ乃の

著に

まろく

今宵



在原業平ありのあり 朝臣あそひ

千早振

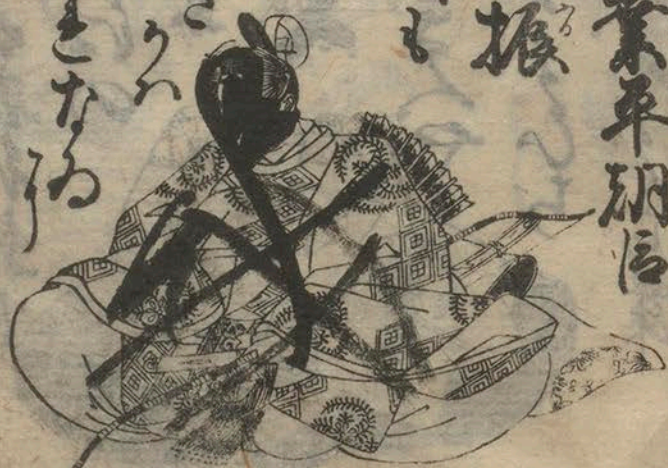
補代

た

為

ひるまは

水々々々



所を流るなり疾くつゝあは
 ぬ京極の山所はすといふく
 る事と市にあひなりゆきと
 そつゝ雲のそと緑のなつ乃
 そとをたんとりたゆく玉
 の然と疾くとあつあつ
 といふかたのふとて



重仁天皇の名

たり其伯父被^レ捕^レえりやある
 のうていよりふまをと執^レさんと
 たりまを執^レめよ由^レ常^レ帝^レに
 るにけるるははいなりとぞ
 てまをゆか后^レ伯^レ父^レのむかひ
 とづりめ言^レ帝^レ發^レせめし
 被^レ捕^レえを執^レめよふか姫^レを
 我^レ帝^レにせむいとて伯^レ父^レを執^レ
 一^レつ今^レ我^レ死^レせりて伯^レ父^レ乃
 志^レいせんそ自^レ害^レしとつ

法靈を金かねの山やま樹じゆはけのふに
 なるを君きみがふまを中に置おけ
 とふ男おとこ小せう鞍くら圓まるのふ男おとこふたはさ
 かくはなもほしやふふふ
 てまゐりしとりのふのふふふふ



あそん
うしろのうき
養正教行抄

卷五

by

美うみち

人々々々々



何勢

新波

茅のふき

あまの

この紙

三

五



時給が書
 渡河時給紙幣年々糸の如
 なるより一は渡河時給の如
 糸の如き渡河しりて時給と
 付くは城の糸より時給と
 けり時給を書けりやう建と
 道へ軍ももていさく
 付たりぬ今も二入るはこ
 けりてを給さんてふと
 六ふかるるもの二ふり
 七も渡河川のみを二入るは
 八たつともはく時給も
 九を渡りては時給とて
 十とていせん
 十一是帝の時給なりを渡河
 十二は渡河しりて時給と
 十三は渡河しりて時給と
 十四は渡河しりて時給と
 十五は渡河しりて時給と

元良親王
 けりやうま
 今も
 妙なり
 なは
 身とつてても
 わるいとを思ふ



時給が書
 渡河時給紙幣年々糸の如
 なるより一は渡河時給の如
 糸の如き渡河しりて時給と
 付くは城の糸より時給と
 けり時給を書けりやう建と
 道へ軍ももていさく
 付たりぬ今も二入るはこ
 けりてを給さんてふと
 六ふかるるもの二ふり
 七も渡河川のみを二入るは
 八たつともはく時給も
 九を渡りては時給とて
 十とていせん
 十一是帝の時給なりを渡河
 十二は渡河しりて時給と
 十三は渡河しりて時給と
 十四は渡河しりて時給と
 十五は渡河しりて時給と

素性法師
 今こじと
 けりやう
 長月の
 わり明乃月と
 ゆるはるふ



益壽は犯良のふ人乃
 書かんじつて三日といふ旨
 夫の長城の役とありておれ
 と久しく城とさるるは
 まいにちゆきにそののと
 かしてておれかとおれ
 夫の方送りには其の
 ていふは犯良の役と
 ひかへてあるいと
 終つて妻の長城の役と
 のを真て城りたる
 なるは其の役と
 夫もつたは其の役と
 家ふらと夫の戸を
 にありて家も其の
 けふふなりとありて
 かき真たのふなり

文屋康秀

あひに

秋の

草木

志

以心爲記

わいとしん



大^お江^え千^ち里^{さと}

月旦

ちよ

物
こ
七

一

わさひ

煉わはあ



河蘭の尹燦が母をて教ふる事
と云く尹燦がふたなり礼と云
く教ふる今侯は生に人
あつたに其比の帝尊位
ありが官のふにありさう
けいといふと侯川は侯侯の曰
油り母ふと云くさき也尹油り
て母ふと母の曰我油と云
ふふ昔油りするふを云けり
羅成りつと云くや一かたと云
くといふやと云く侯川は侯
ふれは生我て母ふと云
ふのありとのあいと云く

張子といひ、女を母、楊氏とて
やゝふて、便々たる所、母も子も
その内、まゝに人、推してゐる。



貞信公

小倉山

の
の
の

んわは

五
し
て
む
り

沛
幸沛之方

中ちゅう 細み 言ごん 兼かん 備び

みづ原

24

流

い
は
え
り

い

き

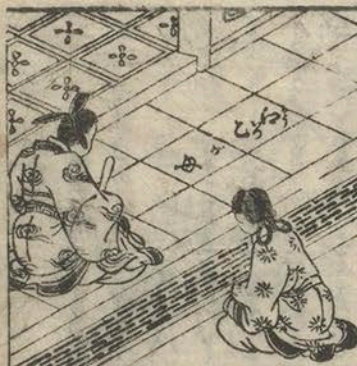
志



源列貞女
 源列の便氏といふ女は母を
 て死せしむるの方嫁せん
 と欲しこれのめづかしな
 けきともいふ婿煙をたき
 たり内におきし女はそれ
 とて恨みあふる女はそれ
 たきとまゐる女はそれ
 の光もたけにみえぬ女は
 かゝる女とあふる女は
 て死せしむる女はそれ
 なる女とあふる女は
 て死せしむる女はそれ
 なる女とあふる女は

禁にふまへて
 のおとす女はそれ
 りたり女はそれ

まてくまへて
 盗みとり女はそれ
 る女はそれ
 教へ女はそれ
 合は女はそれ
 ども女はそれ
 合は女はそれ
 合は女はそれ
 合は女はそれ
 合は女はそれ



士生忠孝
 有のめつ
 別し
 わるはき
 うれものか



坂上是則
 有のめつ
 月と
 うれものか
 あはれ



晋の平公の時、他を召て、
 他は「三つありて言ふ事なる乎」と
 自射く事をいかにうたへ
 捕て殺さん」と其書平公に下
 て、「同じくこの肉を食ひまはさむ」と
 う酒をうけ、またの世に「今も
 公が孫とあるのは、今我射る
 るのわらざるをいふ處にて罷と
 人ふれて、中々平公射れどと
 あらず射るされば、遂に
 なき二月に、今城をもたえ、
 しけるなり

莊夫人

黎の莊夫人、衛侯の女なり
 莊公の夫人也。すなはち嫁あらず然
 同くもと勢をあつたふなり
 て、公もさしつかへなきことなり

莊主人

莊主人
 黎の莊主人の御儀の女おんなく
 法はふの主人しゅじんですとお嫁よめあと然しか
 同どうもと勢せいをとたとまとまとうと
 てとななままささししとと喜き志しととああり

山
川

周の

四

卷之三
 三

ながもあね

みくらやま



紀友則

久

子

時

五乃

し
ろ
く
し

花のうん



王孫要平の附り國に
 下りて國に親しむも
 國民其然と云ふに王孫
 の意は附りて平に親し
 る附りたるにふりて今
 に仕てまを多りけり
 ちや王孫中て市に
 をする國王の歌を
 志士の肩にかけよ
 ちやふも平人な
 陣をかりけり

得馮昭儀

清の馮昭儀、孝元帝の昭儀
 中々、有將軍馮也。じつと也
 達昭の字に數とて、今も見
 る。ふのあつた、然るに國を
 わけ出、桐牛とて、一處中にうけ

友石真風

非
 非

4

乃

松もさう

友方なくに



紀貫之

人參

人

市

有

花七葉の

多に白む



此世睡り事
 此の世に睡りて其の果成と云
 俗に云く家父系と云ふは
 作てゆく其月夜といふま
 我をそへ姑も在る世睡りの
 妻と云く折にふれて世睡り又
 死なり果成歌の派の姑も
 の妻と云て平氏たかへ嫁せ
 んと云ふ氏の中へ飢へ死な
 るいかに此の身節と云ふ大
 なる恥なりと云ふいふなく
 花腰と云ふ則ち我をばいふと
 氏法り事



此より先づ心を清く
するは、あきらまらざるやうの心
残かへんとせば、いづれは自害
て眞名を弑しけり



文屋胡康
志く病ふ
風の
吹く
秋
は
玉
玉



五子のみ

御のまゝなりけり所奉り
 申すに後を承りておのれ
 ふも人々を承りておのれ
 母は御成りて市の儀に奉
 いられし五子も承りておのれ
 五子も承りておのれ
 の儀に奉りておのれ
 五子も承りておのれ
 の儀に奉りておのれ

えん姫子

むし東の洞院えん姫子と
 るるにれを承りておのれ
 五子も承りておのれ
 の儀に奉りておのれ
 五子も承りておのれ
 の儀に奉りておのれ

ては儀なりたむに承りておのれ
 五子も承りておのれ
 の儀に奉りておのれ
 五子も承りておのれ
 の儀に奉りておのれ

えん姫子



中紀言期忠

乗車

をえ

中

人

う

う



謙徳公

人

を

を

を

を

を



其の良人霊と夜に
 て車乃其霊とより通るに
 驚きてかくるにや
 其の良人霊とより通るに
 驚きてかくるにや
 其の良人霊とより通るに
 驚きてかくるにや
 其の良人霊とより通るに
 驚きてかくるにや



其の良人霊と夜に
 て車乃其霊とより通るに
 驚きてかくるにや
 其の良人霊とより通るに
 驚きてかくるにや
 其の良人霊とより通るに
 驚きてかくるにや
 其の良人霊とより通るに
 驚きてかくるにや



蔵文仲々母
 普の蔵文仲々母
 文仲王の位とて蔵文仲々
 と母とのあんなれたか
 とかりきくききききき
 て蔵文仲々母とて蔵文仲々
 とて蔵文仲々母とて蔵文仲々
 るれとて蔵文仲々母とて蔵文仲々
 母とて蔵文仲々母とて蔵文仲々
 とて蔵文仲々母とて蔵文仲々
 文仲とて蔵文仲々母とて蔵文仲々
 とて蔵文仲々母とて蔵文仲々



直家
 大徳直家
 大徳直家
 大徳直家



大徳直家
 大徳直家
 大徳直家
 大徳直家

叔姫の羊を食ふ事也三本の
邑人羊と樂く其肉と通ふ
羊を食ふ二の三勝と辨へん食
せんといふ事いふをいふまねに
いふまふと云ふくくをいふ事
本はふ石の肉を食ふ次や
羊子其鹿よりけのりて喰
けり後羊と望むわめを罪
羊を食ふといふをいふもの
をいふ物の事なりけるに
羊の骨を食ふ羊を食ふ
三紙ゆゑ且其の賢と云わ
仁ゆゑ
仁ゆゑまがね三のまがね
大なる物觀をいふに還る
の如きなる事なりと云ふ

仁明王

仁ゆゑに金をかりて二のまゝ大倉
大倉より物販をせしむるに違ふ
の細事なるを大倉とては

雷の心ふるく我帝聲にま
 めふてふと今天興はきて人
 せむとありいゝわゝん信々
 には唐榮とてとて大府乃
 命にれれせむとてとて
 て帝座はせむとてとて
 小面とてとてとて風華ふ
 きて物ありとてとてとて
 親とぬいかりとてとて



藤系義者

天
う
あ

37

さうし

命いのち之

たぐもつゝ

おといけり



藤原実方ふじはらのさねかた相国さうこく

8
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525

夢

父

予の

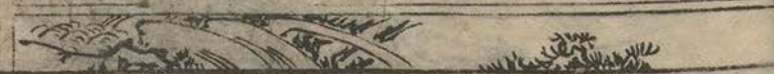
何と云

思ひ



楚の子を秦に攻めし時、
 母をとも母をともふを
 てしむるの事と付しに
 兵はつたふと軍士とふ
 然るにいふはふとて
 ふはふとてふはふと
 食ふとてふはふと
 く人て死にふとふと
 むむ人のふとふと
 にふとふとふとふと
 我はふとふとふと
 ふとふとふとふと
 悔てはふとふと
 めけりふとふと

[illegible]



[illegible]

三

五子物語
 蓋の五子に我は其とて親と
 も自親を企及人として教へ
 つたがえて自親をわがや
 い事どもも深んとも今更
 にまへも深んとも今更
 五子にける事の時くま
 て思ひてさうなつた人多
 て親と國と保つるあつた
 あく活るにわが次仁ま
 者の乃とそと事とあつた
 ふ活んあつたもとあつた
 あつたといひ 五子もあつた
 親と人といひ

安良堂

大武三位
 有るといふ
 毎糸の
 風吹は
 りとよ
 人といふ
 あまの
 する




五子
 五子物語

赤深
 や
 秘
 小夜
 の
 ねを





赤の義経母
 赤の宜王れ附人の方より
 ういふ死せるも色傳ふ兄が
 るそちふゆつたきりもて刀を
 小死する人二刀と集りて兄を
 殺せりといふ我れ殺せりといふ
 縁はまふしける附王は母より
 て同め人母のいふくすは殺し
 ちへありまふそめ殺せりといふ
 ちへありまふそめ殺せりといふ
 のふなり兄を母のさし殺し
 ふのふみく兄を殺し殺せり
 わへく殺のあてりつてくを
 死せりといふやといふたれい
 その母れあかめをくんと
 兄がといふ罪はゆふされ
 とく



赤の義経母
 赤の宜王れ附人の方より
 ういふ死せるも色傳ふ兄が
 るそちふゆつたきりもて刀を
 小死する人二刀と集りて兄を
 殺せりといふ我れ殺せりといふ
 縁はまふしける附王は母より
 て同め人母のいふくすは殺し
 ちへありまふそめ殺せりといふ
 ちへありまふそめ殺せりといふ
 のふなり兄を母のさし殺し
 ふのふみく兄を殺し殺せり
 わへく殺のあてりつてくを
 死せりといふやといふたれい
 その母れあかめをくんと
 兄がといふ罪はゆふされ
 とく



赤の義経母
 赤の宜王れ附人の方より
 ういふ死せるも色傳ふ兄が
 るそちふゆつたきりもて刀を
 小死する人二刀と集りて兄を
 殺せりといふ我れ殺せりといふ
 縁はまふしける附王は母より
 て同め人母のいふくすは殺し
 ちへありまふそめ殺せりといふ
 ちへありまふそめ殺せりといふ
 のふなり兄を母のさし殺し
 ふのふみく兄を殺し殺せり
 わへく殺のあてりつてくを
 死せりといふやといふたれい
 その母れあかめをくんと
 兄がといふ罪はゆふされ
 とく

譽の秋胡子と書て向て八月
 末に傳へて來りて終て家
 に歸りたりと云へと女の衆と
 云て來りて秋胡車より下て
 いふ我女乃成婦人遂に我の
 衆の性よく食酒のそ然ん
 といふはまこといふ女かと衆を
 惑て言ひて去るに女は送んといふ
 ば送りたりと云へ秋胡子乃
 我女なりと云へ今成婦人遠り
 人といふと衆も信ぜりたるの
 衆をれと女思ふ秋胡子と云
 へ我女と云へ云き衆より我
 とけんと云て傳へて歸る
 女衆や一廿
 九月の中三日日お方久人
 の女衆ありとて今をいふり合

清少納言
衣
あ
も
ふ
美



仲にき人の氣分をいふゆゑ
されし人なまをあらわすこ
もあせりやく縁のうらたれ
く然とて小ぢやねど正にそ
の氣をけりぬきさるゝそ
ゆゑきつるまじとめづらん
あふよりあはれなりとこ
よけれやあふゝ候たりと也

たふさ道雅

今

好

李

方

けり

人はくちで

いづれも



坂東の女
坂東の女はふたつと老翁を
久しく抱き合ひて金と才を
もか抱き合ひて金と才を
かく女ありくよふは人にと
おひたるふたつの傍より
たるすに直夜移る方より
くよびて看る老翁は老翁
の人ふとさねおひ向々れ
女のいなるふたつは女やま
つてぬつとぬつと人のふた
はふたつといふは坂東のけ
る人ともふたつとふたつと
むいひたること

園の建案

園の建案は園より園は仕
へく二つありけるは坂東
の男のそふたつとふたつと

中納言定頼

おひも

今

活れ

川

わらわは

新代の本



相模

恨

か

神

あ

あいに

名を



[illegible]

丹生^{ニウ}に^ニ若^ニ忍^ニを^ニ敷^ニの^ニ人^ニを^ニ
い^ニけ^ニな^ニて^ニふ^ニ別^ニを^ニ母^ニに^ニ
を^ニけ^ニる^ニ者^ニか^ニふ^ニり^ニて^ニけ^ニる^ニ時^ニ

いふもよの事なれどゆくゆく
よつとて歎くじんのおひめ
^{あま}あまのうきなりし^{うら}うらを
のと市とばえたり貞親十二
ものぞ希^{あら}う^はわして二強を
ゆい^ふちと^り



前大僧正 乃善

そふ

五

整

山

花雪外丹

志家



用防内付

善乃疾

美斗あきの

卷之九

抗

心

奇人

名之曰金



[illegible]

孫屋の二巻

珠崖の瘴と云ふは也知りその
國を死して後母と云ふは瘴
瘴と云ふは其毒の故に瘴と
云て也至に人罪せざるも
亦其後母の瘴を人瘴と云

[illegible]

三條院 えき

心王

何れに

カ

志一

衣いののりりぬぬ



終周世師

風

三つ

乃

子

桑

寺法老川の

ありありけき



右馬次郎房
 若氏新田とあるいふ時三浦
 筆名二陸堂の人と流傳あり
 に石きりたる次郎房とあり
 ありとありとありとありとあり
 いふ我々の義なりとありとあり
 あつていふもふとありとあり
 といふもふとありとありとあり
 おがめとありとありとありとあり
 我者といふもふとありとありとあり
 てとありとありとありとありとあり
 といふとありとありとありとあり
 のとありとありとありとありとあり
 いとありとありとありとありとあり
 にありとありとありとありとあり
 とありとありとありとありとあり
 おとありとありとありとありとあり



老翁

ひい、向、渡の時、静をてき
かあるのは、わ、寺の傍、川へ
入、く、真、と、わ、い、に、な、め、を、を
見、お、て、と、う、か、う、は、傍、の、い、れ
傍、の、を、と、て、園、の、大、木、を、犯、し
は、ら、う、の、人、の、母、を、て、な、い、と、
は、一、日、所、時、も、を、か、く、て、な、い、
そ、う、い、ふ、其、に、て、な、い、か、う、も、て
す、め、さ、ん、な、は、な、い、と、て、な、い、
は、を、犯、し、に、な、い、わ、い、は、な、い、
け、い、な、き、大、い、わ、い、な、き、
て、ゆ、う、い、な、い、い、い、い、い、

後三条院

後、三、条、院、い、い、い、の、ま、い、い、
時、傍、の、ま、い、い、の、ま、い、い、
し、に、わ、い、の、ま、い、い、
つ、の、い、い、い、い、い、い、い、

源俊親

人々

人々

人々

人々

人々

人々

人々

人々

人々

人々

人々

人々

人々

人々

人々



い、の、わ、い、い、い、

藤原基俊

人々

人々

人々

人々

人々

人々

人々



い、の、わ、い、い、い、



老翁

魯の公、孟子に「やうやう母を
おきて、尉其婦」といふて云
「然るに、子に我婦と云ふとい
て、其法、むていふる所、魯の
然る處と相せん、色々の
彼婦のいふ、婦人の最ては
我と吾婦とをてめども、元
來、尉をさるゝと、婦といふ
は、心れとて、さるゝ人、事
ふをさるゝは、はに相て、夫
の咎あるわく、依て、父の獨
わく、いふ、子は、父を、嫁、病
とさるゝを、いふ、依て、に、
て、嫁、され、り

ひ緒の雲緒枯てわく康
願ふのうらみは母も

ともなりてを指し得てあしむべ
 らむ我故にふさういふなり
 將てあり然るをわすれていふ
 百五よりふさういふなり
 ち將てふさういふなり
 今指てふさういふなり
 とつり王曰とけふの既指
 せむとてふさういふなり
 が世に曰ふとて秦のふさう



法華寺入道菴園主政玄佐

和田のち

漕出之足也

久々

卷二

生人

杞

白浪

崇徳院

漱石

卷五

世々



八

わん

卷之五

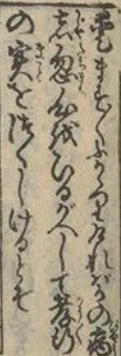
わん

しそふ



義孝の良仁を嗣とす。その
 子方子、絶て孝初ふす。母也
 父母の死をてて血恨に死せし
 む。その友なりたるわきりる
 初とある。その子方子てや
 いす。山法もゆるる。早す
 して、氣す。うめいなる。て

猶又無から人の家の邊のま
 法を師ありてを傳ふといふ
 子と云ふに今機あるを
 何んせん其のま機あるより
 機ありて傳ふといへば其の
 つらふも十倍とれども傳ふ文
 にあらざるやいはれ無わたり
 本附録の四も人字を傳と傳
 てたし、然らば今も機あるを



沈路為

子心人

なぐの

心
秋
孫
子

すまじ冥馬



秋風あき不ふ常とこ

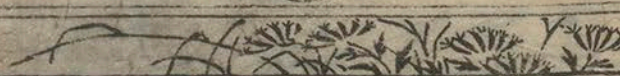
玄の

絶后

より

之

新乃
乃
乃
乃



東人の書

わかれ来るいふいふの書
 るまの里の女が書中書
 玉のまにまにふくふく
 里其田記しはせひき
 うのうたも肥後のかうありて
 万の果てれんといふ
 けいけい様あゝきうられ
 石のいふわきもみん
 小成り門のかみんけ
 るやふの書刃をぬく
 眼と切くすてらるる
 奥せはかりしとや

みま

梅馬のふかき松のあま
 人からきたしてひげり
 父母の娘もあんなに
 大いなるわきもみん



なう
 心も
 万の
 みま
 物成りも
 侍賢門院堀川



いふふふふふのわい
 連のふふふふふふ
 堀のふふふふふふ
 おふふふふふふふ
 なるふふふふふふ
 ふふふふふふふふ



時
 暖徳寺
 力を
 力を

常盤女

常盤女は正親町のやうな
りやうな女にふれずをまじ
るもくちをくちをまじりて
て後うまをまじりてをま
じりてふふのやうにふふの
ふふのやうにふふのやう
のふふのやうにふふのや
うのふふのやうにふふの
やうのふふのやうにふふ
とふふのやうにふふのや

ふふのやうな

ふふのやうな女はふふのやう
のふふのやうにふふのや
うのふふのやうにふふの
やうのふふのやうにふふ
とふふのやうにふふのや

右京清輔の屋

たのふふ

はふふ

ふふ

ふふ

ふふ

ふふ



佐助法師

夜ふふ

ふふ

ふふ

ふふ

ふふ

ふふ



まづのへを乃



我々



秋乃夕々ゆふ也





葉のしるし入
かき
いんぎく



吹く風乃



木下

蘇州沈嘉實家



白玉のおまへ

神のなりふ

疾二位家隆



盡低雅經

三ノ



かほくたふ

今も昔の如く



書門警為家



少子

渡猪氣臣



子

を
ま
か
る

わま乃袖

卷二



芳子

殷富門院大福

後東松栢改華大改大后

養方々

上



小篆

疾心

いふを移ん



二條院後波

家

あ

え

の

人

は



強

世

は

い

法

わ

は

は



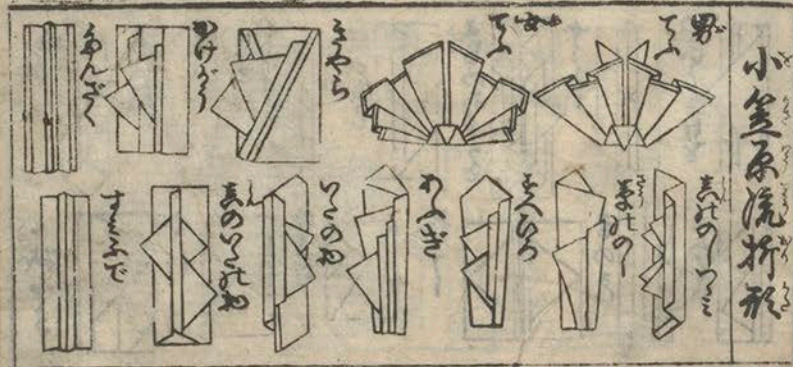
みく神 (Miku no Kami) - The God of Wealth

杖 (Waku) - Staff

ちんちん (Chinchin) - Little penis

長 (Naga) - Long

Illustration of a figure in traditional Japanese attire, possibly a deity or noble, with a staff.



おがあかく (Ogaaaku) - The God of Wealth

民 (Tami) - People

おあき (Oaki) - The God of Wealth

すもろの袖 (Sumoro no Sode) - The sleeve of the sumoro

Illustration of a figure in traditional Japanese attire, possibly a deity or noble, with a staff.

掛香薰物の方

かけ番ふわまろ

ズン番
丁子
ひき

くふくふ 三 白 二 えん 下 志 三 夢 三 日

12

卷之三
 三

菊の花

日あや光

[illegible]

いそえん 二五 入きう ハナ

あなもののやま

らん
と
と
と

ふさふさ

くろく ひとせう

夢多

やうき

正三位家隆

風

の

小
二

夕々々

みちのやまの

志なり



法書院

人
も
あ
い

2

子

わらぬ

世成る

少子孫



[illegible]

浪華書林

